「読むこと」を焦点化

四種類の読み方で『走れメロス』に迫ろう

教科書二年
本の世界を広げよう　〔読四〕
走れメロス〈小説〉
短歌と俳句、それぞれの表現〈解説〉
〔四時間配当〕

一　基本的な考え方

●学習のとらえ方

「本の世界を広げよう」というタイトルのもと、『走れメロス』と「短歌と俳句、それぞれの表現」、それにブックトークがセットになった単元を、文学作品の読みに重点を置いて取り組んだ指導例である。配当時間が四時間しかないので、ここでは『走れメロス』のみを扱い、残りの学習材は、第四単元と第五単元の間にある「本の世界を広げよう」（十二月）で扱うものとする。

『走れメロス』は長く採用されている学習材で、さまざまなアプローチで実践されているし、また、多くの学習活動を組織することが可能な作品である。ここでは、「読むこと」の学習として位置づけ、次のような異なる四種類の「読み」を学習活動として計画した。

〔第一次〕 声に出して読む。
全員が輪になり、一文ずつリレー読みする。

〔第二次〕 語彙や用法を読む。
よくわからない語句や用法の意味を調べる。

〔第三次〕 多角的に読む。
ワークシートを使って読みを広げる。

〔第四次〕 主題や要旨を読む。
登場人物か作者にあてて手紙を書く。

どの「読み」も一時間ずつ行い、四時間でこの学習をまとめる。学習者は、まだ文学的な文章を味わう力の伸長が期待されている状態であるので、じっくりと味わいながら読みを深める学習ではなく、活動や環境などを変化させて主題や作品への興味を持続させる学習となるように意図した。

可能であれば、第二次の学習をコンピュータルームや図書室で行うことをお勧めしたい。第二次は難語句の意味や用法を調べる学習なので、コンピュータの辞書ソフトを使うこともできる。学習環境を意図的に変化させることで、学ぶ意欲の持続が期待できるだろう。

●この学習で身につけさせたい力

①文脈における語句の効果的な使い方を理解し、自分の言葉の使い方に役立てる。〔第二次〕
（学習指導要領「読むこと」第二学年及び第三学年の指導事項ア「語句の意味や用法」）

②文章を読んで人間・社会などについて考え、自分の意見をもつ。〔第四次〕
（学習指導要領「読むこと」第二学年及び第三学年の指導事項エ「主題や要旨と意見」）

二　観点別評価の進め方

●「おおむね満足できる」状況と判断するための視点

①語句の意味や用法を新しく自分のものにできる。〔第二次〕

②主題とかかわる内容の手紙が書ける。〔第四次〕

●「努力を要する」状況にある学習者への対応

①国語辞典に慣れていない学習者に対しては、コンピュータを利用させる（もちろん、この逆もありうる）。学習の多様化をねらって、最初から辞書とコンピュータを学習者に選択させることも考えられる。〔第二次〕

②手紙を書こうとする人物に関する情報を文中から抜き出して、気づいたことを挙げさせる。〔第四次〕

三　指導と評価の計画例（四時間）

第一次
（第一時）

学習材のリレー読みをする。
①いすをフルーツバスケットの状態にして座る。
②一人一文ずつ本文を音読する。
＊読めない語句、不自然な読み方、聞き取りにくい読み方などがあれば適切な読み方を教える。
③疑問点を一つだけカードに書いて提出する。
＊何を書けばよいのかがわからない学習者には、印象に残った場面や意味のわからない語句などを振り返るようにさせる。

第二次（第二時）	第三次（第三時）	第四次（第四時）
わからない語句や用法の意味を調べる。 ①図書室やコンピュータルームで、国語辞典やPCの辞書を使ってよくわからない語句の意味や用法を調べ、ノートにまとめる。 ＊必要に応じてコンピュータやソフトウエアの操作を教える。	**ワークシートを使って読みを広げる。** ①ワークシートの課題について考え、作品の読みを広げる。 ＊第一次に書いた疑問カードをもとに、ワークシートを作っておく。	**登場人物か作者にあてて手紙を書く** ①八つ切り大の色紙に、自由な形式で登場人物か作者にあてて手紙を書く。 ＊あらかじめ評価基準を伝え、主題と無関係な内容にならないようにする。 ②できあがった手紙を発表し合い、いろいろな考え方や感じ方に気づく。 ＊必要に応じて、手紙の意図や読み取った主題について尋ねる。

組み合わせることで万人に対応しようという発想である。

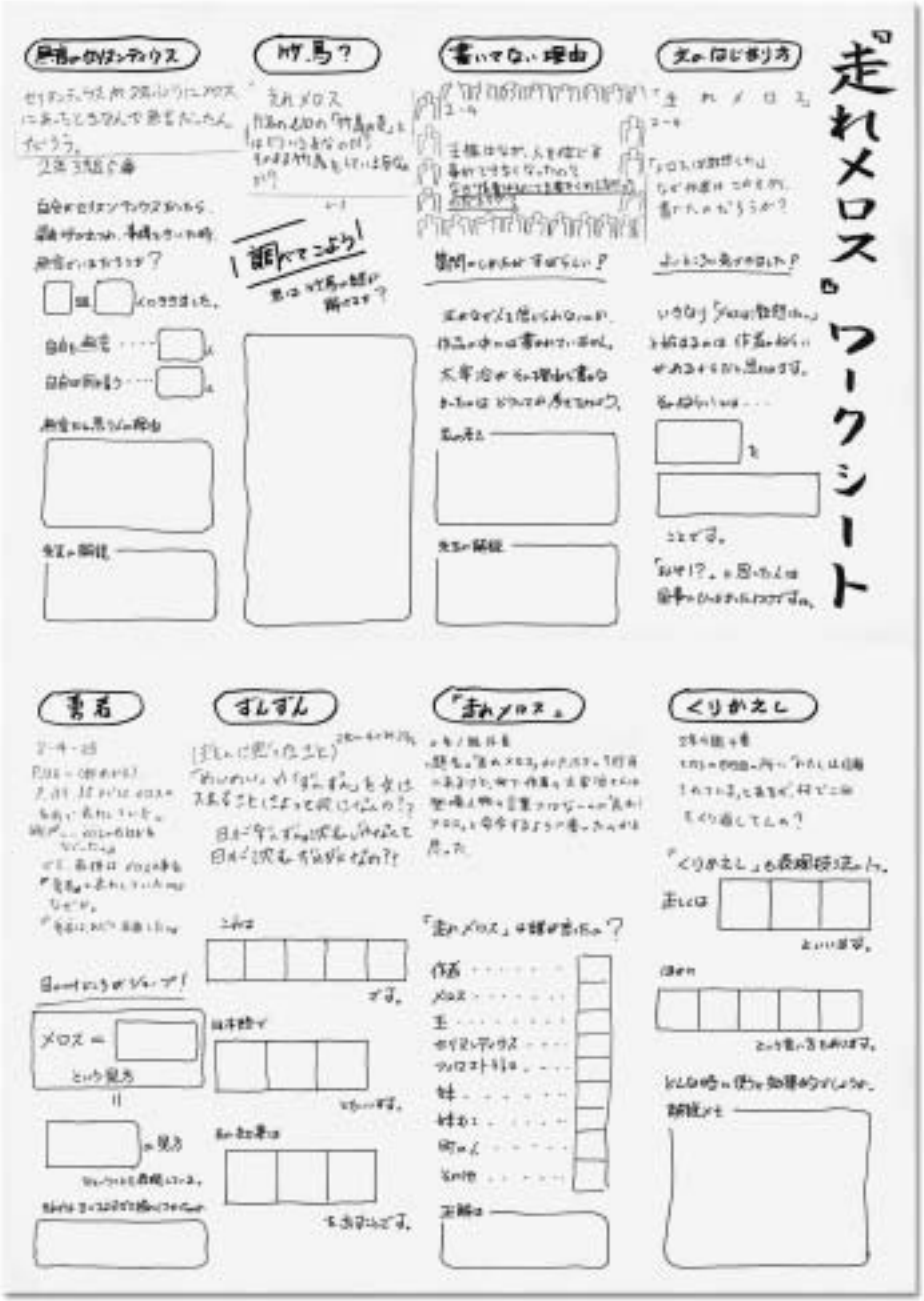
このような学習計画においては、学習者が混乱しないように学習活動を配列することが重要である。ここでは「音読」→「意味調べ」→「ワークシート」→「手紙」という流れを作ることで、漸次学習者の読みが広がりと深まりをもつように計画した。

また、「語句の意味や用法」と「主題や要旨と意見」に焦点化していることもポイントである。学習指導要領「読むこと」の指導事項は、前述の二つのほかに「内容把握・要約」「ものの見方や考え方」（第一学年）、「構成や展開」「情報の活用」（全学年）「表現の仕方」（第二学年および第三学年）がある。「表現のしかた」をねらいとすることも可能だが、『故郷』など第三学年の学習材で扱ったほうが深まりが期待できると考えた。

学習者の疑問を利用してワークシートを構成したことも、学習意欲の持続をねらったものである。指導者が意図的に内容を構成してもかまわないが、ここでは自分以外の学習者の疑問に触れることで、見方や考え方が広がることを期待している。35ページに示した例では、扱う内容が少ないが、学習活動で扱った事柄以外にもいろいろな要素があるということに気づくことがねらいなので、あえて作品の要素全部を網羅しなかった。

四　この学習のポイントとなるところ

多様な学習活動を用意することで、多様化する学習者の興味や特性に対応することが大きなポイントである。万人に適した学習活動がないのならば、異なる学習活動を



《学習者の疑問を利用したワークシート例》